

# 留学経験者インタビュー



氏名 : 小堀 龍之介  
所属 : 社会・国際学群 社会学類  
学年 : 4年 \*インタビュー時  
留学先国 : オーストラリア  
留学先大学 : ジェームズクック大学  
留学期間 : 2024年7月～2025年7月 (13ヶ月間)

## オーストラリアを選んだ理由は？

移民や先住民族に興味があり、多文化共生を国家のアイデンティティとしている国としてオーストラリアを選んだ。また、英語能力を伸ばしたかった。

## 留学前に力を入れるべき準備は？

英語！英語資格のスコアは大学の応募要件でもあるし、自分の場合は奨学金の申請にも必要だった。Speakingは留学先での友達作りに役立つが、やるなら練習しやすく、伸びやすいListeningがオススメ。他には留学先で開設されている授業内容を調べてみるのもいいと思う。

## 留学費用は？

奨学金として「はばたけ！筑大生」を利用した。月7万+仕送りでの生活だったため現地での生活はかなり貧乏だった（笑）。よりお金が必要になった場合はバイトすることも視野に入っていた。留学前には利用できる奨学金を十分に調べ、可能な限り申し込むとよい。

### 毎月の留学費用

奨学金 (はばたけ！筑大生)	7万円
住居費	10万円
食費など生活費	4～5万円
+ 交際費・雑費	

## 留学先のサポート体制は？

留学生オリエンテーションで必要な情報はすべて集めることができた。指導教員の先生はおらず、困ったことは友達同士で解決した。レポートの採点が日本よりもかなり厳密だったこともあり、レポートの添削をしてくれるライティングデスクという窓口をよく利用した。



↑ジェームズクック大学内での一枚（本人提供）

## 授業の進め方の違いは？

筑波大学のように授業の曜日が固定されて6コマで構成された時間割は存在せず、毎週、授業の開講時間や曜日が異なる。授業前に授業動画と論文（30ページ、3つ）が与えられ、それらを理解している前提で授業が進む。準備なしでは授業についていけないので授業外の時間的有效活用が必要不可欠。小テストもあった。

### どんな部屋に住んでいたか&選んだ決め手は？

寮では自分の部屋はあるが、シャワーやトイレ等は共有していた。

出発前のトラブルと留学開始時期が学期の途中だったので重なり、大学から紹介された安い寮は埋まってしまっていたので、自分で比較検討した。

ホームステイは留学生を家族のように扱ってくれる場合と、ビジネスとして割り切って冷遇される場合があるので出発前の情報収集が大事。

### 人間関係を築く上で気を付けたことは？

愛想笑いをしないようにした！

日本では場の雰囲気を乱さないためにするための行為だが、良い印象を持たれないので意識していた。他には特定の人とだけ仲良くするのではなくいろんな人と積極的に交流することを心掛けていた。

### 留学前後で考え方の変化はありましたか？

日本の当たり前が通用しない環境で、他者に期待するのではなく、異質な価値観をそのまま受け入れる姿勢が身についた。

また、慣れない環境で苦労を重ねる中で、これまで無意識に自分に課していた期待というプレッシャーから解放され、周囲の反応に振り回されず、等身大の自分で物事に取り組めるようになった。

### 留学をどうキャリアにつなげますか？

高校生の頃から将来、国際機関で働きたいという一貫した展望がある。

先住民族に関する現在の研究を大学院で続けて、実務経験を積み、自分の専攻に近い分野で国際機関で働きたい。

働く際に、留学で得た経験が生きると信じている。

### 定番の自習スペースは？

場所としては、図書館、寮のラウンジ、屋外テーブル（天気が良いため）の3つ。一番利用したのは図書館。家から大学まで行くのが面倒なときは、自分の部屋で勉強することもあった。学内であれば建物外にいてもwifiがつながるぐらいwifiは使い勝手が良い。図書館には、私語厳禁のルールがなく日本に比べて騒がしかった（笑）。

### 留学を目指す人へのメッセージ

違う国で過ごしたという留学の経験は長い目で見ると、人生において貴重なものになります！学術的な確固たる理由がなかったとしても、興味があれば挑戦するべきだと思います。留学の一歩を踏み出せたら、それだけで価値があるので、ぜひ前向きに留学に行ってみてほしい！応援しています！

インタビュー・記事執筆  
生物資源学類2年 山下 遼馬

この記事は2025年度に多文化共修RUN-UP活動参加学生により製作されました